男女の人物画に及ぼすメディアの影響

子安増生・郷式　徹

1．目　的

第６回調査では、第４回および５回調査に引き続き、子ども自身による人物描画を取り上げ、性別対応の問題を再検討するため男女一人ずつの人物画を描いてもらい、それとメディア接触との関連性について重回帰分析などを用いて検討する。

2．方　法

対象者：第６回調査の分析対象者は男児475人（平均年齢68.13ヶ月、月齢幅65～71ヶ月）、女児425人（平均年齢68.16ヶ月、月齢幅65～71ヶ月）、合計900人であった。

調査内容：調査用封筒にＡ４判画用紙（横置き）２枚と油性ペンを同封して郵送した。「おとうさん（おかあさん）でも、先生でも、おともだちでも、だれでもいいので、男の人（女の人）の絵を描いてください。」という保護者の指示により、子ども自身に油性ペンで人物画２枚を描いてもらった（第５回調査と同一の手続き）。

3．分　析

子どもが描いた人物画について、その描画内容による評定と、グッドイナフ人物画検査（Goodenough Draw-A-Man Test; DAM）の採点基準による得点化を行った。描画内容による評定に関しては、男性画では「顔のみ」268人、「顔＋胴」620人、女性画では「顔のみ」263人、「顔＋胴」621人の４群に大別した。DAM得点は男性像と女性像に分けて算出した。この６つの指標のすべてにおいて性別の主効果（１％水準）が有意であり、女児の方が男児よりも評定値／DAM得点が高かった。これは、第５回調査の結果と一致する。

４歳時点と５歳時点の直接比較が可能なDAM得点の結果（男性像／女性像）では、４歳男児6.50/6.89、４歳女児8.51/8.64、５歳男児10.19/10.01、５歳女児13.48/13.08となり、男女とも４歳から５歳にかけての得点の伸びは大きいが、性差は拡大傾向にある。

重回帰分析の結果では、描画内容およびDAM得点に対する影響は、性別の効果のみであり、テレビ接触時間、ビデオ接触時間、ゲーム接触時間などの影響は見られなかった。また、３～４歳のデータ（第４～６回調査）に基づくパネル分析の結果では、わずかに描画内容に及ぼすビデオ接触時間のマイナスの影響のみが認められた。

4．結　論

女児の方が男児よりも描画内容得点およびDAM得点が高いことの理由として、男児は男性像を描き女児は女性像を描くという性別対応と、女性像の方が衣服や髪飾り等の装飾品を描く可能性が高くなるからという仮説は、前回調査の結果で否定されたが、本研究の結果も同じものであった。一貫した性差の原因について、今後更なる検討を要する。

５歳児では、テレビ・ビデオ・ゲーム等のメディアに対する接触時間の個人差や、そのコンテンツの個人差が拡大していくが、そのことが描画内容得点およびDAM得点に大きな影響を与えることはなかったと考えられる。